

「自転車に乗る女」のメディア表象： 三浦環から原節子へ

紙 屋 牧 子

1 はじめに

日本において自転車は、1930年代半ば頃まで女が乗るべきものではないという考え方が支配的であった。これについて真っ先に思い出されるのは、映画『二十四の瞳』（1954年、松竹、木下恵介）である。1920年代末から始まるこの作品において、女性教師（高峰秀子）は自転車に乗っていたことで島民に「ハイカラ」と言われ反感を買ってしまうのである。1934年9月22日付『読売新聞』では、「女性に自転車は絶対に良くない」という見出しで、馬の鞍よりも小さい自転車のサドル部分が女性の局部を刺激し続けることにより、結婚生活にさえも悪影響を与えると批判している。しかしながら、1930年代後半、つまり日中戦争開戦後のさまざまなメディアにおいて、「自転車に乗る女」を肯定的に描いたイメージが大量に流通するようになる。しかし、GHQの占領下においてその表象は更に変容することになる。

なお、本論は、戦前から戦後の日本映画および関連する芸術ジャンル・メディアにおける「自転車に乗る女」の表象の、時代毎の共通性とその変容を明らかにすることを目的としており、芸術ジャンル・メディア毎の表象の特性にはあえて立ち入ることはしない。

2 〈自転車美人〉の流行

19世紀末に日本に輸入された自転車は当初、上流階級の進歩的な女性あるいは花柳界の女性などの限られた女性のみが乗っていたが¹、そうした姿は「はしたない」と冷笑される一方で、ある種のスペクタクルなイメージとして享受されることになる。

のちにオペラ歌手になる三浦環（1884-1946）は、東京音楽学校（現東京芸術大学）へ通学する際、芝から上野まで自転車で滑走していた姿が「自転車美人」と世間で評判となり、彼女をひとめ見ようとする人々が通学路で列を成し、新聞にも取り上げられたとのちに自身が語っている。²【図1】で中央に座る女性は、学友たちと共に自転車を前に写真におさまる三浦環である。

小説家の小杉天外（1865-1952）は三浦環の評判を知り、ヒロインの女学生が自転車で颯爽と登場する場面で始まる新聞連載小説「魔風恋風」（『読売新聞』1903年2月-9月）【図2】を発表した。三浦環が東京音楽学校に入学したのは1900（明治33）年のことで、



図1 写真中央が三浦環。三浦の死後に刊行された著書『お蝶夫人』（吉岡明光編、右文社、1947年、口絵）。



図2 梶田半古による「魔風恋風」の挿絵。『読売新聞』1903年2月25日、1頁。

三浦自身の回顧によれば当時、女学生で自転車に乗るのは自身と、木内キヨウ（のちに全国初の女性の小学校校長となり、戦後は女性参議院議員）のふたりであった³。一方、木内キヨウは、自分が自転車に乗る女の新風俗をいち早く作品に取り入れたのだらう。木内は自転車に乗るのに不便だったので元禄時代の絵を参考にして長い袖を切り、それが「元禄風」として流行するようになったとも述べている。【図3】は、元禄風の着物を着用して自転車に跨がる木内のポートレートである。

その一年後の1901年の新聞記事には、自転車に乗った十数人の女学生が向島に颯爽と現れ、通行人の注目の的となった様子が、「美人隊自転車」という見出しで取り上げられている。



図3 木内キヨウ。『読売新聞』1905年2月4日、9頁。

一昨日の向島ハ頗る賑やかなりき。其れに一高の端艇競槽^{レガッタ}がありしかバ、そのあたりハ青年特に多かりしなり。忽ち響く呼鈴^{ヒヤス}の数声に、行き交ふ人我知らず振り向けバ、十余人の妙齡の令嬢ハ一列に、自転車^{ビヤス}を並べて乗り出したるなりけり。海老茶袴や、紋付の羽織や、被布や、肩掛や、桃割や、英吉利卷や、リボンや、さてハ腰の据ゑ工合、体のこなし^{サドル}、柄にかゝる様。顔の向け方、眼の着け所、——総べて一方ならぬ工夫を凝らしたる様にぞある。かくありて艇庫の横なる曲り角にて、彼等ハ一斉にひらゝと車上より飛び降りぬ。恰も胡蝶の花に戯るゝが如し。寸時ハそこに憩ふ所ありしが、やがて又もとの車にひらゝと乗るかと思へしに、再び真一文字に馳せん出す。新教育を受けたる貴女ハかくの如しにして、二十世紀の新舞台に乗出さばやと叫ぶらんようなり。嗚呼、貴女、新日本に御身等あるを知って、我国の青年男子大いに意を強くするに足るべし。神よ彼等を恵め！

「美人隊自転車」『読売新聞』1901年2月12日朝刊、4頁。

「魔風恋風」は、自転車で女学校に通学する才色兼備の女学生がヒロインで、当時流行の女学生風俗やその恋愛模様を描いて小杉を一躍流行作家へと押し上げたほど評判となり（あまりの人氣に『読売新聞』を増刷したほどだったという）、1905年には東京座で五代目中村芝翫がヒロインの女学生に扮した歌舞伎狂言として上演されている。小説「魔風恋風」が発表された3年前である1900年にも『人民新聞』に実在の女性をモデルにしたといわれる「自転車お玉」という連載小説が青々園（伊原敏郎）によって発表されており⁷、こちらもまた歌舞伎狂言として1901年に浅草の常磐座で奨励会によって上演され⁸、更に1919年に日活が映画化するなど、当世流行の題材となっていた。映画「自転車お玉」については、フィルムが現存しないため正確な内容を確認できないが、映画雑誌の紹介記事を読むと、自転車曲芸師の父の死で芸者に身を落としたヒロインのお玉が、横恋慕する男の手から逃れるため自転車で山道を滑走¹⁰し、馬に乗った追っ手を見事に振り切る場面がクライマックスとなっていることが分かる。当時の新聞広告【図4】にも、「全員負傷／車馬全滅／冒険大撮影」と記されているように、映画『自転車お玉』は、自転車に乗った女とそれを追う男の冒険活劇として製作された。この時代にあって「自転車に乗る女」は、それだけでスペクタキュラーなものとして表象されていたのである。

自転車は当時未だ新しい存在だった女学生の「モダン」なイメージと深く結びつくようになる【図5】。三越呉服店の広報誌『時好』（1906年1月）の付録「時好双六」には、「女学校」「テニス」「写真」といった当時の「ハイカラ風俗」が20駒描かれているが、そ



図4 映画「自転車お玉」の新聞広告。『読売新聞』1919年11月15日、4頁。



図5a 記事「自転車の流行に就いて」の挿絵。『東京朝日新聞』1901年5月11日。



図5b 本田和子「女学生の系譜・増補版 彩色される明治」、47頁。

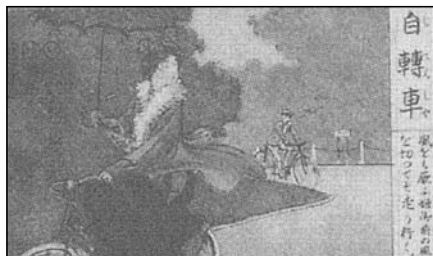


図6 自転車に乗った女学生が描かれた双六の駒。「時好双六」(三越呉服店編『時好』1906年1月号付録)、前出『女学生の系譜・増補版 彩色される明治』、16頁より抜粋。



図7 自転車に乗った女学生が描かれた引き札(広告)。左の空白部分に広告の文字が入る。瀬原捨松編・出版『新版引き札見本帖』、1903年。

のうちのひとつは、まさしく「自転車に乗った女学生」である【図6】。同様のイメージは、当時の広告(引き札)にも使われており、それほどに人々の視線を奪うものであったのだ【図7】。

3 受難の〈自転車美人〉

スペクタキュラーな存在としての〈自転車美人〉はエロティックな対象でもあった。例えば「自転車お玉」の物語においてヒロインは芸者であり、「色」を売る玄人女性である。これが女学生のイメージと結びつけられるときに、人々を魅了する鮮やかな存在でありながら、同時に性的に「墮落」した(する)女のイメージともなる。自転車に乗って颯爽と現れた「魔風恋風」におけるヒロイン萩原初野は、帝大生との恋愛で一線を越えてしまい、「墮落女学生」¹²として悲劇的な運命を甘受しなくてはならない。当時の雑誌に寄せられた次の風説からも、世間で自転車に乗る女学生のイメージが「墮落女学生」と結び付けられていることが分かる。

川端で海老茶式部に眼鏡と云ふハイカラ女学生が「バイヲリン」か何か手にして自転車を飛ばして来るが彼女は誰れやら主なき子を懐妊して何処か田舎で産み落して来たのだと書生が悪口を云ふて居た

小石川腰弁当「ハガキ集」『清輪』1905年3月、33頁。

こうした表象は、同時代の新聞における〈自転車美人〉の報道と重なる。例えば、「自転車美人の悲運」という見出しの記事が、自転車の名人だった神楽坂の芸者が自転車を経験にして華やかな男遍歴を経た後、日露戦争下でナショナリズムに目覚めた男に捨てられ貧しく成り下がった姿を、「永年多くのお客を悩まし抜いた報にて因果はめぐる自転車の如し」と締め括っているのは(『東京朝日新聞』1904年9月14日)、「自転車に乗る女」

に対する悪意あるイメージの現れである。元々は外国人の私娼で、日露戦争の局面で東郷平八郎の通訳として活躍した女性を〈自転車美人〉としたうえで、その後捕虜になったという災難を伝える記事（『東京朝日新聞』1904年8月19日）は、「自転車に乗る」女の活躍を賛美しつつも、やがては災難に遭うことに注目して取り上げている点では共通している。自転車乗りの練習をしていた女が、ただ負傷したというだけの記事（「自転車美人の負傷」『東京朝日新聞』1901年5月20日）もあり、あるいは、次に引用する記事は

流行の初めには自転車美人と珍しがられて銀鈴の響き朗らかに行く人の耳を掠め、綾袴の裳緩やかに風に翻ってハイカラ美のモデルよと唄はれし女の自転車乗も今日は既に目馴れし故か誰あって振返るものなし〔後略〕。

『東京朝日新聞』1905年7月16日朝刊、6頁。

とわざわざ揶揄している。しかしながら、これまで述べてきたような「魔風恋風」の大ヒットぶりや、「自転車お玉」の舞台化・映画化からは、その後もしばらくは「自転車に乗る女」の新鮮さとそのスペクタクル性が衰えなかったと考えられる。

「自転車に乗る女」の特異性とそのことによる危険性を強調し、あるいは揶揄するような報道のなかには、モダニズムとして称揚する体制とは別に、拭いがたくある偏見がある。「自転車に乗る女」のスペクタクル化——冒頭に触れたような、自転車に乗る三浦環の姿にモダニズムへの憧れをもって接するような受容の仕方は、あくまで都会のインテリ層を中心にしたものであり、そうではない態度も当然あった。1909年発行の『東京二六新報』には、郊外に住む女学生が遠く離れた都会の女学校への通学路で遭う悲惨な体験が実に3度に渡って連載されている。少し長いが、「自転車に乗る女」に対して非インテリ層が実際どのような態度で接していたのかが、よく分かる文章なので引用する。

〔通学路で〕種々の人から冷評冷罵を受けるのは随分残念で耐りませんでした。初めは氣まりが悪くてたまらず、毎日父の鳶合羽を頭から被って一寸見に男女の区別の附かない様にして居たが、自転車の造り方が違ふので、直ぐに女だ女だと見現はされて了ったので且つ又暑くも成るし、今度は最うまゝよと合羽を捨てましたが、成る可く目立たない様にと注意して黒っぽい筒袖許りを着ました。目立たぬ様に何程気を附けましても、女が自転車に乗て廻ると云ふので、三里の間、其町々特有の冷評を真向から浴せかけられるのです。然し朝は^あはる^る位が些と苦しかったのですが、其他は別に困ったこともなく、楽なものでした。帰途は六時で家へ帰り着くのが七時頃ですから、冷評は此時に頂戴するのです。「何うだい、高襟は」だの「生意氣な奴、どやしつつけて遣れ、面は覚えて居るぞ、帰りに見やがれ」忤と下等な男子が罵てる。坂本から先が最も烈しく苛めます。家の中から石を投げたり、水を飛ばしたり、厭な言葉を懸けてはドッと一斉に笑ふのです。実に残念でたまらず、一々下りて剣突を食はして遣りたいと胸は煮え返る程でしたが、我慢をして斯う云ふ處は別にして急いで風の様

に通って了解しました。特に可笑しいのは此辺の者が何時か顔を覚えて了って、又通って行く、彼の女は中々感心だぜ、何處の交換局へ通ふだらうかと云ふ声が、或る日私の耳へ這入りました。電話の交換手と見られたのです。が、まだ、此様なのは構ひませんが、日曜杯に図書館へ出掛ける時、風呂敷も何も持たずに通ると「何うだい、芸者が自転車へ乗って行くぜ、当世だなあ、今日何處に何が有るんだい」と若い者が云ふ。此時は腹が立って、口惜しくて、何とか云ひ度かったんですが、大人気無いと思ひましたから、黙って唇を食ひしばって通り過ぎました。

「自転車に乗った婦人の経験談（上）」『東京二六新報』1909年7月25日、4頁。

この文章からは、当時きわめて高価だった自転車を女が乗りこなすことへの嫉妬だけでは理解できないほどの執拗さで、「自転車に乗る女」に対して男たちが烈しく嫌悪あるいは逆に執着している（つまりは良くも悪くも眼を奪われている）様子がよくわかる。男たちが「自転車に乗る女」を電話交換手や芸者と思い込んでしまうという例からは、多かれ少なかれエロティックな対象として捉えていたことが推察される。芸者はともかくとして、当時の女は職業婦人であるというだけで多くの場合は良家の子女とは認識されず、例えば、引用記事に比べて時代は下るが溝口健二監督の映画『浪華悲歌』（1936年）において、性的に墮落していくヒロイン（山田五十鈴）の最初の職業が電話交換手であったことが思い出される。事実、明治期において女が電話交換手であることで、勤務中に年齢を訊ねたりデートを申し込んだりする男性からの電話が跡を絶たず、また、そうした利用者からの若い女的美声を求める意見を反映して、男性の電話交換手が廃止されたり、また、採用条件に「十三歳以上二三歳以下」で「夫なきもの」という条件まであったりもした¹³のだ。

4 スペクタキュラー／エロティックな存在

男たちが何故そこまで「自転車に乗る女」にエロティックな憧れを抱き、あるいは逆に嫌悪したのかということについては、女の貞操観念の問題も関わっている。例えばスポーツ以外でおこなう乗馬の場合、ある時期においてまで、貞淑な女は跨がずに横座りする騎乗スタイルが普通で、跨ぐ騎乗スタイルは男に限られており、女のいわゆる「男乗り」は特別視されるものであった。欧米でも横座りの騎乗スタイルが20世紀半ばまで継続されて¹⁴おり、日本においても1920年代頃までは横座りの騎乗スタイルが普通だったようである¹⁵。但し、「男乗り」が皆無だったわけではない。次に引用する明治期の新聞記事は、当時の日本で馬に跨がる女性に対する視線の厳しさを物語っている。

去ル一月三十日午後二時ごろ、二十ばかりの島田髻の美人ふたり、打ち揃いて仙台平の袴を着し、馬に乗りて吾妻橋の向こうより河岸通りを南へ駆け行きしが、人々アラ美しなどみる中に、本所表町にて青ものを担ぎたる六十歳ばかりの老翁を蹴倒した

り、折ふし廻りあわせる巡查、見咎めてかの馬上の美人を引き卸し、屯所へ連れ行き
て問い糺したるに、これは芳町の芸妓にて、おまんとその友達芸者となりしとかや、
これによりて贖罪金一円五十銭を出し事すみたり。さてかの老翁も幸わいに怪我もな
かりし由なれども、近頃未熟なる者の無暗に馬に乗り歩行くハ、誠に危き事なり、増
して女なるをや。

『東京日日新聞』1875年2月2日、3頁。

もちろん、1871（明治4）年になってようやく平民の乗馬が許可された時代¹⁶に、女性の乗
馬そのものが特別な行為ではあったが、注目すべきは、袴を着用しての乗馬だったという
点だろう。袴は当時の一般女性が着用する衣服ではなかった。つまり、芸妓ふたりはおそ
らくは両足を開いた騎乗スタイルで、そしてそのために、当時としてはほとんど男装のよ
うないでたちで現れたので通行人の注目の的となり、騒ぎをひきおこすことになってし
まったのだろう。次に引用する「女性がシャツに袴で乗馬し説論」という見出しの記事
は、女性が跨いで乗馬している姿をさらに厳しく咎めるものである。

本港羽衣町二丁目廿三番地高島権三店、三菱会社に出る米国人フラケバカンの妾三
田おみね（十九年）と、常盤町三丁目廿三番地川島おやす店の広島県士族森おみや
（二十三年）の兩人は、旭町通りを馬に跨がり鞭を挙げて揚々と乗り廻るそのいでた
ちは、おみねはシャツに袴を着し鉄扇を持ち、おみやは島田まげを振り乱し袴を着
て、いかにも落ちそうなる風体にてありけるを、査公は特別に目を付け、あまり危険
ゆえ拘引の上段々警部より御説論を受け下られし兩人とも、馬を牽いて股をさすりな
がら帰宅せりと。

『横浜毎日新聞』1879年8月2日、3頁。

いかにも馬を跨ぐ女性に対する好奇と悪意の視線が向けられており、明治後期になって、
やはり自転車に乗って颯爽と現れて人々の眼を奪った女学生たちの事例と重なる記事で
ある。

しかし、自転車は馬と異なり、構造上、必ず跨がなくてはならない乗り物であった。先
に述べたように、欧米では20世紀半ばまで女性が馬を跨がずに騎乗するスタイルを美德
とする考え方が温存されていた。イギリスでは1860年代末頃から自転車に乗る女性が雑
誌 *Punch* でしばしば風刺されるようになるが、例えば、1869年5月15日発行号で女性
が乗馬のように跨がずに自転車に乗るのだろうかという風刺されているのはその一例である。
また、1895年6月22日発行号には、ニッカーボッカーを履いて自転車に跨る女性が“男
まさり”と風刺されているが【図8】、一方で、スカートで自転車に乗る姿もまた上品と
はいえないと評されてもあり（“Cycling in Hyde Park”, *THE Illustrated London News*, April
18, 1896, p.483）、自転車に乗る場合においては股の分かれた服装、つまりパンツスタイル
の導入が比較的速やかにおこなわれたようである。¹⁷ フランスでは近年、事実上無効化して



図8 “The Man and the Maid”., *Punch*, June 22, 1895, p.291

「貴方の理想は？」
「女性らしい女性ですよ、魅力的 [fair] なお嬢さん」
「じゃあ、私は貴方とは結婚できないわね！」
「それは有難いです。男まざりのお嬢さん！」
(抜粋、引用者訳)



図9a *Punch*, May 18, 1895, p.239

颯爽と自転車滑走する女性に通行人たちが注目している。男性は眼をみはり、若い娘は羨望の眼差しを向け、その母は顔をしかめている。



図9b *Punch*, Feb. 1, 1896.

「おまえたち、あんなのに乗りたいかい？」
「ううん、あんなに乗ったらレディに見られないや」
(引用者訳)

いたとはいえ、1800年にパリ市が制定した通称“ズボン禁止令”（正確には、公共の場において、女性が健康上の理由意以外で異性装をおこなうことを禁止するもので、ズボンの着用を希望する女性は医師の診断のうえ、警察署の許可が必要と定めたもの）が最近まで存続していたが、2013年2月になって、フランスの女性権利相の発言によって正式に撤廃されたことがフランス内外で話題となったが、この条例は、1892年にまず、自転車に乗る際は例外と改訂され、乗馬の場合は1909年になってから着用が認められるようになったという¹⁸。日本におけるパンツスタイルの先駆けとなるのは袴であり、今や女子大学生の卒業式での定番の衣裳として着用されているが、明治期までは男性用の衣服と認識されており、それを一新させたのが女学生たちの存在であった。1872（明治5）年に東京女学校が開校された際に、和装が学校生活に向いていないと判断した文部省が女学生たちが袴を着用することを認め（太政官正院に「入学ノ女子著服の義ニ付伺」を提出し、「何ノ趣、袴ノミ著用致サシムベキコト」という指令が出た）、当時の男性がよく着用していた縞の袴姿の女子学生が界限にたくさん出沒し始め、やがて当世の風俗と化していったのである¹⁹。女学生たちは風にひらひらと翻る裾を周囲にみせつけながら自転車を滑走し、良くも悪くも人々の好奇の眼差しを集めることになってしまう。先に触れた *Punch* でも自転車に乗る女性に対する憧れ・嫉妬・悪意の視線が風刺されており【図9】、同時代のイギリスでも日本と事情が変わることはない。これまでみてきたように、馬や自転車に跨がるという、当時は未だ見慣れぬ行為は、恐らくはセックスそのものを暗示させるもする、異性にとっては烈しく眩しいアクションであったはずで、そのために宣伝目的のためか芸妓のあいだで明治初期においては乗馬が流行したようである。

近き頃東京に芸妓の馬に乗ること流行せしが其風次第に移り来て高崎市中にても等しく芸妓の馬乗盛むに成て我もわれもと競ひけるより各はれやかに粧ひたて紅の裳のすそ風のまにまに翻りけ出しぎぬのひまより雪なす脛のほの見ゆる有さま美といはむか異といはむか何事の為にとてかかる事を為すやらむ推して考ふるに彼久米の仙人はもはや開化したるべければ今は唯遊蕩艶冶郎どもをおつこちにせむとての手くだにやあらむか。

『書拔新聞』第一号、1873年12月、7丁目表-裏。

明治中期になって女学生たちに端を発する〈自転車美人〉が流行すると今度は、芸妓が女学生の扮装で自転車に乗った姿を写した美人絵葉書も登場するようになる【図10】。

「自転車に乗る女」は開脚という、当時としては見慣れぬ官能的なアクションのために憧憬の対象となり、あるいは性的墮落のイメージとも結びつき、嫌悪の対象となったのだろう。「馬に乗る女」が珍しかった時代においては、女性の乗馬も健康上問題視する議論がなされていたようだが、必ず跨がなくてはならない自転車に女性が乗ることは、医学的な見地から烈しく否定される。本論の冒頭でも簡単に触れた「女性に自転車は絶対に良くない／月経異常や早流産はまだ愚か／結婚生活は悲惨？」という見出しの記事は医師に取材し次のように書く。



図10 芸妓が女学生の扮装をした明治中期の美人絵葉書。井上章一『美人コンテスト百年史 芸妓の時代から美少女まで』、新潮社、1992年28頁。

自転車乗りは若い女性の身体に果して良いものでしょうか？ 或は何か弊害はありはしないでしょうか？ [...] その大体の結論としては婦人には良くないといふことになってゐます。何故かと云ふに自転車の鞍は一時間問題になった乗馬の鞍よりもずっと狭く小さいし、形の上に於ても婦人の局部を刺戟し易くできています。自転車に乗って始終局部を刺激する結果は、子宮の位置を変へ、骨盤を充血させ、卵巣の動きを悪くする、ひいては月経異常やこしけを起し、或は分娩率を低め、流産の原因にもなります。また結婚後は不感性になることが多い。或るドイツの医者は、その女性が生む子供の頭の格好にまで影響を与へるとさへ云つてゐます。この外、未だ春を知らない少女などの中には、局部に感じる刺激から自慰行為と同様な恐ろしい弊害を屢々行ふことがあります。そのために少女は益々自転車を過度に乗り廻し、遂に結婚後は極度の不感症に陥ります。

『読売新聞』1934年9月22日朝刊、9頁。

やはり局部がサドルに触れることを問題視し、それが性的な自墮落を引き起こし不幸な結婚生活を送る羽目になると指摘するこの疑似科学的で偏見に満ちた記事の内容は、「魔

風恋風」に描かれた「墮落女学生」——すなわち、自転車に乗って颯爽と現れた進歩的でモダンな女学生が貞操を失い、最後には病死してしまう表象と約 30 年もの時を隔てても基本的には変るところがない。

5 銃後の守りの象徴へ

自転車に乗る行為が女性の身体に悪影響を与えるという意見は、1930 年代後半になって否定されることとなる。この頃、『朝日新聞』（1937 年 2 月 23 日）が「進め！国民体位の向上へ／颯爽ペダルの乙女／軍馬の自転車女学校」という見出しの記事で、通学に自転車を使用する女学生の姿を身体鍛錬の鑑として報道し【図 11】、あるいは、雑誌『アサヒグラフ』では、自転車に乗って巷を滑走する主婦たちの姿を「挺身隊」として賛美している【図 12】。さらに、1940 年以降に発行された『読売新聞』（7 月 1 日、3 頁）では、海外の女性が自転車に乗る姿をシリーズ化して紙面で取り上げるなど【図 13】、新聞や雑誌などのメディアにおいて、「自転車に乗る女」のイメージを健康美として称揚する記事が次々と掲載されるようになる。

そしてついに 1941 年の『朝日新聞』には、それまでの自転車は女性に悪影響を与えるという言説を覆す記事が掲載される。「女性の自転車乗り／健康上、寧ろ良い ほとんど害がない」という見出しのこの記事では、女性が自転車に乗る行為を健康に良いものとして、むしろ積極的に奨励している。

この頃の「自転車に乗る女」の美人絵葉書においては、かつての芸妓によるそれと全く異なるイメージが映し出されている【図 14】。つまり、大日本国防婦人会のタスキをかけ、自転車のサドルとハンドルに手をかけて微笑む女性はいかにも淑やかで、ここでは、「自転車に乗る女」の官能性は一掃され、戦時下のナショナリズムに貢献する健全さの表象へと変貌を遂げているのだ。なお、「大日本国防婦人会」の名称は、1932 年の設立時から 1942 年の「大日本婦人会」への統合までしか存在しないので、その間に印刷されてい



図 11 『朝日新聞』1937 年 2 月 23 日朝刊、9 頁。



図 12 『アサヒグラフに見る昭和の世相 5』、朝日新聞社編、136-137 頁。



図 13a 『読売新聞』1940 年 4 月 9 日朝刊、4 頁。



図 13b 『読売新聞』1940 年 4 月 17 日朝刊、4 頁。



図 13c 『読売新聞』1941 年 9 月 1 日朝刊、4 頁。

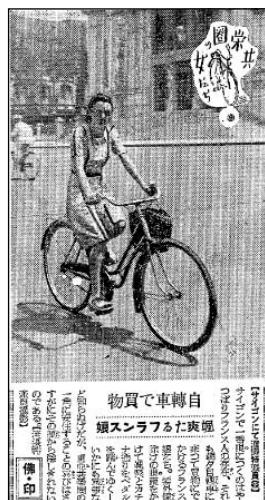


図 13d 『読売新聞』1942 年 7 月 31 日朝刊、4 頁。



図 13e 『読売新聞』1942 年 8 月 1 日朝刊、4 頁。



図 14 大日本国防婦人会のタスキをかけた女性の美人絵葉書。

るものだろう。この美人絵葉書の表出するイメージ、つまり、朗らかな健康美を表象するものとしての「自転車に乗る女」は、1942 年に公開されヒットした映画『ハナコサン』に重なる。この映画において、宝塚歌劇団出身（「清く正しく美しく」のイメージ）で明るく健康的な丸顔の美人スターだった轟が、モンペ姿で颯爽と自転車に跨がる姿は【図

15]、例えば、日本よりはるかに女性の社会進出が進んでいた（内戦時代には女性兵士が存在した）スペインで、自転車に乗る際、一見スカートだが実は股が分かれた「スカート・パンタロン」が、女らしさを損なわない服装として推奨されていたことを考えれば、画期的なものだったといえるだろう。²² 轟が歌う主題歌「お使いは自転車に乗って」もまた流行曲となったものであるが、次のような歌詞であった。



図15 映画『ハナコサン』（1943年、マキノ正博）轟夕起子が主題歌「お使いは自転車に乗って」を歌う場面。

お使いは自転車で気軽にゆきましよ 並木道そよ風 明るい青空 お使いは自転車に乗って 颯爽と あの町この道 チリリリンリン（ハナ子が自転車を走行するシーンから、筆者による採録）

轟が自転車に乗るシーンで朗らかに歌うこの詞は、同時代の新聞メディアにおける一般女性に関する表象と重なる。つまり、『ハナコサン』が公開される約一ヶ月前に発行された『朝日新聞』（1942年11月1日朝刊）に、「銃後奉公の誠心」から「隣組」の組長に志願した女性を讃える記事を掲載しているのだが、その見出しこそが「買物も颯爽と自転車」というものであったのだ【図16】。さらに遡れば、同じ『朝日新聞』（1939年7月11日朝刊）では、1939年に初めて郵便局に女子の集配員が採用されたことを報じているが、この記事の見出しもまた「颯爽と自転車で」と、出兵していく男性の代理として働く女性の活躍を伝えるものであった【図17】。

戦時下にも拘わらず明るいミュージカル映画であるため、「反戦映画」と評される機会が多いが²³実は周到な戦争プロパガンダ映画である『ハナコサン』において、ヒロイン（轟夕起子）が歌う主題歌「お使いは自転車に乗って」は、まさしく「自転車に乗る女」を銃後の守りの象徴として喧伝するためのものだったのだ。

なお、女性が自転車に乗る行為を良しとしないイデオロギーは、必ずしも性差別によるものだけではない。それには、結婚後の性生活と出産への悪影響を強調する点で、優生学が少なからず影響を与えていると



図16 『朝日新聞』1942年11月1日朝刊、7頁。

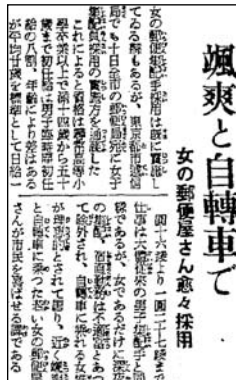


図17 『朝日新聞』1939年7月11日朝刊、11頁。

考えられ、その意味では戦時下のナショナリズムに矛盾するものではない（戦争へと突き進んでいくなかで1938年、厚生省が設立され優生政策を推進した）。しかしながら、戦争が激化していく状況下での銃後生活の効率化のために自転車²⁵を近代的機械として喧伝する必要がある、その目的が従来の議論よりも優先されたのではないか。

6 戦後民主主義と女性解放

銃後の守りをうたいあげる「お使いは自転車に乗って」は大ヒットしたために、戦後も歌い継がれることになるが、労働運動の報道では「宣伝は自転車に乗って」（『朝日新聞』1950年2月6日）と、自転車の女王コンテストの審査の様子を報道する記事では「美人は自転車に乗って」（『朝日新聞』1954年5月9日）とそれぞれ変奏され【図18】、戦時下におけるコンテキストは忘却されてゆく。

冒頭で触れたように、『二十四の瞳』（1954年）においては、進歩的かつ（島民にとって）高慢な女性に乗るものとして自転車が登場していたが、ここでは、「自転車に乗る女」への偏見が、時代遅れで排他的なものとして、すでに歴史化された表象として提示されているのである。戦後になって大石先生とかつての教え子たちとの再会の場面において、偏見が完全に払拭された自転車は、むしろ甘美な記憶を呼び起こす道具として、そして平和の到来と希望の表象ともなっている。

戦時下において「銃後の守り」の象徴となった「自転車に乗る女」の脱性化された健全なイメージは、敗戦後もそのまま踏襲されつつ、占領期の民主主義化によってもたらされた「女性解放」「男女平等」の表象へと変容する。1949年に公開された映画『青い山脈』（東宝製作、今井正監督）で、封建的な大人たちに対して勝利をおさめた若い男女が並列して自転車を駆るシーンは、戦後民主主義における新しい男女関係を示唆している【図19】。同年公開の映画『晩春』（1949年、松竹製作、小津安二郎監督）でヒロインの紀



図18 「美人は自転車に乗って」と自転車の女王コンテストの様子を伝える記事。『朝日新聞』1954年5月9日夕刊、3頁。



図19 『青い山脈』（1949年、東宝、今井正）のステル

子（原節子）が実は密かに恋慕していた父の助手（宇佐美淳）と浜辺へ向かうサイクリング・シーンもまたこうした表象と無関係ではないだろう【図20】。デヴィッド・ボードウェルが指摘するように、（まさしくアメリカニズムの象徴である）コカ・コーラの広告が映し出されるこのシーンで、原節子は土手を宇佐見淳と肩を並べて自転車で走り、ときには宇佐見に先んじる勢いさえみせる²⁸。このシーンは、病気で婚期が遅れていた原節子の病状の回復や宇佐見に対する心情と同時に、その戦後民主主義的な女性としての側面を描いており、「女性解放」というテーマをも含んでいるのである（原節子は宇佐見や父（笠智衆）の麻雀につきあったりもすることが台詞で語られるが、そのことは不健全視されてはならず、むしろ彼女の男性に劣らない活発さの現れとして扱われている²⁹）。



図20 『晩春』（1951年、松竹、小津安二郎）原節子と宇佐見淳が海岸沿いをサイクリングする場面。

なお、戦時下における「自転車に乗る女」の表象の健全さを強調する側面が、占領下においても断絶することなく円滑に引き継がれたのは、戦時下の国家総動員体制の全体主義的なし国家社会主義的性格が、ニューディール体制の担い手たちによって推進された前期占領期政策（「逆コース」以前）の理想主義的左翼イデオロギーと合致する部分が少なく³⁰なかったことを理由のひとつとして挙げることが可能だろう。

7 結論

明治期から戦後における「自転車に乗る女」の表象は、当初は異形の女のスペクタクルとしてあったのが、日支事変以降のナショナリズムの高揚と総動員体制のなかで女の銃後の守りを強化し、総力戦へと動員するプロパガンダへと変容し、占領期において戦後民主主義の到来と女性解放を告げるものへとさらに変容していった。本論は海外における「自転車に乗る女」の表象についてわずかに触れるに留めたが、欧米と日本との同時代性として考える場合に恐らくは、「自動車に乗る女」の表象も視野に入れて論じる必要があるだろう。別の機会に改めたい。

註

- 1 当時の雑誌によると、1905年当時における自転車に乗る女性の数は次の通りだったという。女子大学校：13人、音楽学校：8人、虎ノ門女学館：89人、三田輪友倶楽部：20人、櫻輪会：2人、芸妓（新橋）：3人、芸妓（よし町）：4人、芸妓（柳橋）：2人、芸妓（赤坂）：6人、芸妓（烏森）：3人、浅草公園：8人、北郭の遊女：27人、自転車雑誌愛読者：40余人

- (初声「はがき集」『清輪』1905年7月、46頁)。
- 2 三浦環「自転車小町」『新青年』1938年11月号、204頁。『お蝶夫人』吉本明光編、右文社、1947年、237-238頁。
 - 3 前出『お蝶夫人』吉本明光編、237頁。
 - 4 「明治婦人子供風俗 紙上展覧会／木内先生が元祖か？ 女の自転車のり」『読売新聞』1935年2月4日朝刊、9頁。
 - 5 同上。
 - 6 稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』、中公新書、2007年、121頁。
 - 7 1901年に単行本化されている(『自転車お玉 探偵実話』前編・中編・後篇、金槇堂)。
 - 8 「今月の芝居(二)」『都新聞』1900年11月8日、5頁。
 - 9 映画『自転車お玉』監督：田中栄三、出演：衣笠貞之助、山本嘉一、藤野秀夫、横山運平、五月操。
 - 10 『内外活動写真雑誌』1920年1月号、35-41頁。
 - 11 本田和子は当時のそれまでのヒロイン像との比較から、「髪も袖も袴の裾までも風になびかせての爽やかな出現」をする「魔風恋風」のヒロイン初野が「類のない新鮮さで私たちに瞠目させる」と評している(『女学生の系譜・増補版 彩色される明治』青弓社、2012年、51頁)。
 - 12 稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』、中公新書、2007年、120頁、参照。
 - 13 村上信彦『明治女性史(三) 女の職業』、講談社文庫、1977年、252頁。
 - 14 山村明子「十九世紀女性の乗馬服とその特質」『服飾美学』第33号、2001年、91頁。
 - 15 穴吹弘『趣味の乗馬と高等馬術』、天青堂、1925年、139-140頁。
 - 16 宮澤正典「明治前期婦人乗馬考——『女学雑誌』を中心に——」『史朋』、55頁。
 - 17 前出「十九世紀女性の乗馬服とその特質」、92頁。
 - 18 Pellegrin, Nicole & Christine Bard, *Femmes travesties: un "mauvais" genre*, Clio et Presses Universitaires du Mirail, 1999, pp.155-156. 『毎日新聞』2013年2月5日夕刊、6頁。
 - 19 前出『女学生の系譜・増補版 彩色される明治』、53頁。
 - 20 山本不二枝「乗馬」『嫁入叢書 趣味篇』実業之日本社編、実業之日本社、1930年、190頁。
 - 21 『朝日新聞』1941年7月1日、3頁。
 - 22 磯山久美子『断髪する女たち 1920年代のスペイン社会とモダンガール』、新宿書房、2010年、274頁、参照。
 - 23 山根貞男が「歌と踊りと音楽は、そんな戦時色の点描のなか、信じられないほどの底抜けの明るさで出沒するのである。一種の抵抗精神をそこに見ることは可能」と評している(『マキノ雅弘 映画という祭り』新潮社、2008年、75頁)。また、加藤幹郎も「戦意昂揚にならない戦時映画」と題した文章で、「笑い声のたえない日常生活があまりにも楽しげに描写されているので(あくまでも銃後の物語であることが強調されているとはいえ)、本作が大東亜戦争中の四三年に製作公開されたことなど夢のようで」、故に、「国家的イデオロギーによって維持されていた同時代の映画の規範を揺り動かしている」と評している(『一九四〇年代日本映画の新潮流』『日本映画は生きている 第2巻 映画史を読み直す』、岩波書店、2010年、黒沢清他編、256-258頁)。
 - 24 この問題については、拙稿「『ハナコサン』(1943年、マキノ正博)の両義性：「明朗」な戦争プロパガンダ」(『美学』63号、2012年6月)を参照のこと。
 - 25 明治期においても、戦時下において女性は積極的に自転車に乗るべきと日露戦争の長期戦

を見込んで主張している言説があるが、女性の身体におよぼす悪影響については否定されていない（清輪雑誌記者「自転車と女性」『清輪』1905年6月、1-2頁）。

- 26 ちなみに、アメリカにおいては逆に、戦時下に家庭の外へと動員され社会的力を得た女性が、戦後はむしろ家庭内へ囲い込まれる。つまり、1940年代後半から50年代にかけて、母性愛の必要性を強調した映画がハリウッドで量産されるのである。加藤幹郎「ジャンルとジェンダー」『映画 視線のポリティクス 古典的ハリウッド映画の戦い』、筑摩書房、125-153頁、参照。

- 27 デヴィッド・ボードウェル『小津安二郎 映画の詩学』杉山昭夫訳、青土社、1992年、501頁、原書は1988年。

- 28 女性のあいだでサイクリングが流行し始めた19世紀後半のイギリスでもやはり、新しい女の表象として、男性に先んじて、あるいは男性よりも上手に滑走する女性がしばしば風刺されている【図21】。

- 29 父に言われるがまま、お見合い結婚を選択する紀子の人物像について、デヴィッド・ボードウェルは「紀子は父親よりも古風で、自分がいなくては父はやっていけないと言い張り、男やもめが再婚することに憤慨する」（前出『小津安二郎 映画の詩学』、499頁）と指摘し、ドナルド・リチーもまた、紀子を「伝統的な娘」（『小津安二郎の美学 映画のなかの日本』山本喜久男訳、社会思想社〔現代教養文庫〕、1993年〔初版は1978年〕、32頁）と位置づけているが、紀子をただ単に古風で伝統的な日本女性と見做しがちな従来の議論は一面的である。

- 30 全体主義と社会主義ないし共産主義との共通性については、下記を参照のこと。スーザン・ソントグ『土星の徴しの下に』富山太佳夫訳、晶文社、1982年、106-107頁、原書は1980年。

- 31 イギリスでは1895年8月に刊行された雑誌 *The Lady Cyclist* に Louise Jeye の「自転車によって新しい夜明け、解放の夜明けが到来した。今日の若い女性は〔年配女性の〕お目付役や、さらに鬱陶しい求愛者から逃れ、意のままにペダルを漕ぎ、光り輝く田園へと解き放たれることによって、真の独立を感じることができる […]」（引用者訳）という文章が寄せられており、まさしく「自転車に乗る女」が女性解放の表象となっていた（Cited in Rubinstein, David, "Cycling in the 1890s", *Victorian Studies*, Autumn 1977, p.68）。



図21a “The Perils of Cycling” *Punch*, June 26, 1897, p.321
「ついてらっしゃい！」（引用者訳）



図21b *Punch*, May 16, 1896, p.229
「来る途中に自転車に乗った紳士を見ませんでしたか？」
「いいえ、でも丘の下で古い傘を修繕している男性なら見かけましたよ。」（引用者訳）

付記：本稿は韓国日本学会第82回学術大会（2011年2月、於韓国・漢陽女子大学校）における口頭発表「戦前から戦後の日本における〈女〉と〈自転車〉の表象：映画を中心に」に基づく。